

令和6年度 学内競争的資金採否一覧

令和7年3月31日

「社会貢献プロジェクト」(1/22WEB申請締切 MSC(組織)として複数案件申請の場合はセンター長にて取りまとめ

	件名	MSC申請者	申請額(千円)	採否	採択額(千円)	概 要
タイプA MSC	地元に生息する希少種を救え(長野県南牧村)	井波明宏	670	採	670	野辺山高原には、絶滅危惧種のタルマイスゲ(Carex buxbaumiiWahlenb.)の自生地がある。この湿地は、希少な植物・水生昆虫等が生息する。その貴重な生息域が埋め立てられることになり、地元の希少植物の保全をしているボランティアによる移植保全作業が進められている。山岳科学センターハケ岳演習林はこれに協力し、タルマイスゲを増殖する。更に、自生地に生息する水生昆虫の代替生息域となるようなビオトープを設置する。地元の生物多様性の損失、回復軌道に乗せる「ネイチャーポジティブ」に向けての社会貢献として活動する。

「生命環境系長、生命地球科学研究群長・生命環境科学研究科長裁量経費」(6/21支援室申請締切)

	件名	MSC申請者	申請額(千円)	採否	採択額(千円)	概 要
	菅平高原実験所大明神寮保存活用に係る南側伐採数払い作業	津村義彦	726	採	500	山岳科学センター菅平高原実験所は発足から90年が経過し、施設内の樹木もかなりの高木、大木に成長するとともに周辺の繁茂が進んでいる。これまでも計画的に伐採や枝下ろしを実施するとともに技術職員による刈払いなどで日々環境整備に努めてきた。しかしながら、南側フェンス周辺は 傾斜地となっていることや繁茂が進んでいることから技術職員等による刈払いが困難な状況となっており、隣接するラグビー日本代表合宿でも利用されるアンダーアーマー菅平サニアパークに敷地を越えて侵食する状況となっている。隣接地へ損害をあたえるリスクを軽減するためフェンス周辺の伐採を行い、今後の環境維持に係るコストの削減につながる。
	山岳科学センター菅平高原実験所樹木園等整備推進	津村義彦	979	否	—	山岳科学センター菅平高原実験所では樹木園として一部を一般公開している。施設内の樹木は高木、大木に成長し、枯死した樹木や枯枝、冬季の雪や台風・強風による倒木、落枝が数多く生じるとともに繁茂が進んでいる。また、樹木園内の観察道は技術職員等によりメンテナンスを実施しているが泥の道となっており一度雨が降るとぬかるみが長期間続き転倒などの危険やメンテナンスの実施に影響を及ぼしている。枯枝や落枝の処理とともに、生じたウッドチップを観察道の整備のために活用できることからマルチチップ導入を申請するものである。
	山岳科学センター菅平高原実験所アニマルトラッキングの増刷	津村義彦	162	否	—	山岳科学センター菅平高原実験所が2020年に発行した「アニマルトラッキング」は菅平高原における野生動物の足跡や糞の様子などをまとめた冊子で、菅平高原実験所の自然観察会参加者からの人気も高く、さらには冬季の山岳科学センター公開実習「動物学野外実習」等でも参考資料として利用されている。2020年の発行時に刷った在庫が不足することから増刷のための予算を申請するものである。
	恒温恒温室・冷凍機の交換	津村義彦	825	否	—	恒温恒温室は、温度や湿度を一定に保つ部屋であり、湿度に鋭敏な生物材料の研究や、JIS規格準拠の材料試験を行うために不可欠な設備である。恒温恒温室は常時稼働させる必要があるため、定期的な保守点検が欠かせない。これまでは申請者を含む1〜2名の教員が大学に代わって保守費(8〜20万円/年)を負担し、その性能を維持してきたが、導入から14年が経過し、本来の性能を維持するのが困難になりつつある。この設備を引き続き活用するためには、湿度の調節に欠かせない冷凍機の交換が必要である。
	恒温恒温室・冷却コイルの交換	津村義彦	550	否	—	恒温恒温室は、温度や湿度を一定に保つ部屋であり、湿度に鋭敏な生物材料の研究や、JIS規格準拠の材料試験を行うために不可欠な設備である。恒温恒温室は常時稼働させる必要があるため、定期的な保守点検が欠かせない。これまでは申請者を含む1〜2名の教員が大学に代わって保守費(8〜20万円/年)を負担し、その性能を維持してきたが、導入から14年が経過し、本来の性能を維持するのが困難になりつつある。この設備を引き続き活用するためには、湿度の調節に欠かせない冷却コイルの交換が必要である。

「戦略イニシアティブ(A)」

	件名	MSC申請者	申請額(千円)	採否	採択額(千円)	概 要
	R6(重点育成研究拠点)	津村義彦	3,420	採	3,420	山岳科学センターは全国級研究拠点を目指して、山岳生態系のITを用いた自動観察システムの基盤整備を行い、国内外の利用者の利便性を図っていく予定である。また国内だけでなく国際的にもネットワークを強化して山岳科学センターの知名度を上げていき、国際共同研究を企画して行く。また国内では屈指の山岳領域として「山理解領域」、「山管理領域」、「山活用領域」における分子生態学の拠点を形成していく。